中朝国境地帯から見る中国・北朝鮮関係の現在

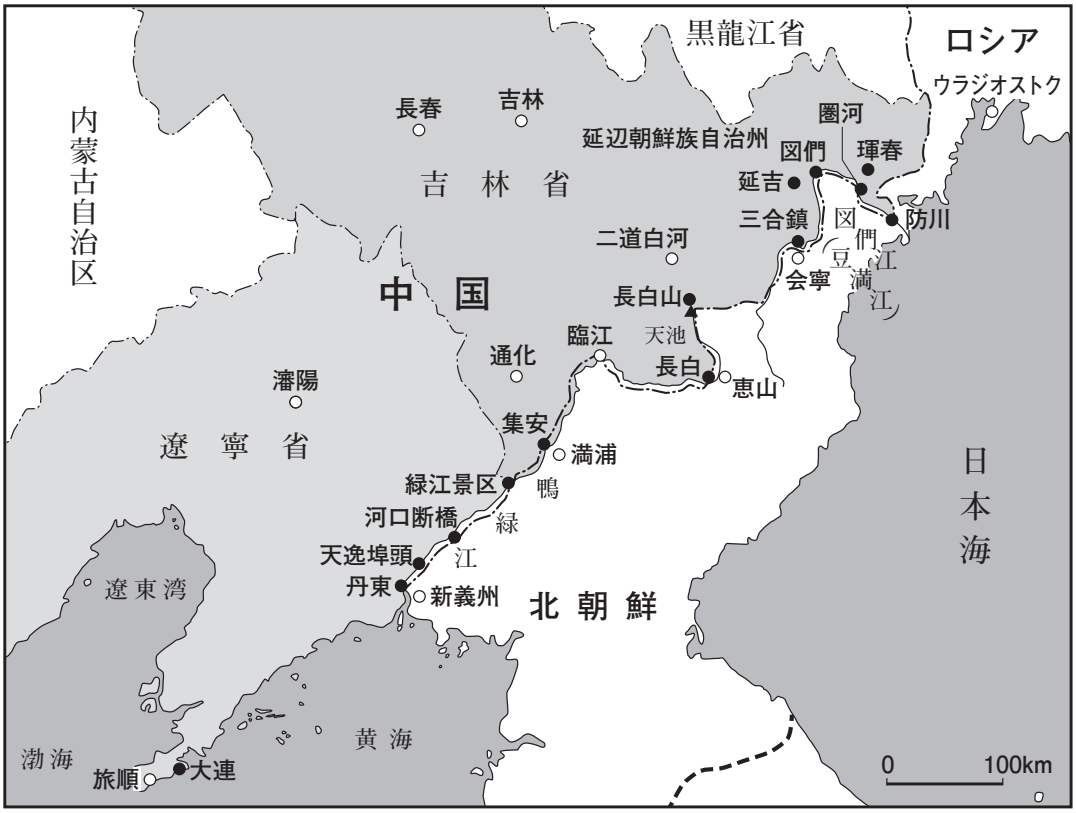
佐渡友　哲
孔　義植

1. はじめに
2. 延辺朝鮮族自治州と延吉市
3. 調査の行程と中朝露国境地域
4. 丹東における中朝関係
5. 調査のまとめ
6. 下位地域圏研究の展望

1. はじめに

この報告書は、二〇一五年八月に実施した中国と北朝鮮の国境地域の調査結果をまとめたものである。改めていうまでもないが、日中韓の三か国で唯一、陸路で国境が接している地域が中朝間である。中朝国境は、東側辺境では、ロシアとも国境を接する図們江によって隔てられ、それより西側では、長白山を源流とする鴨緑江によって隔てられている。

その中朝国境地域を私たちは、東端の防川から西端の都市、丹東市まで、二つの川（江）に沿って、およそ九〇〇キロの国道を四日間で走ってきた（地図参照）。私たちは中国から国境を超えて北朝鮮に渡ることはなかったが、途中、数百キロにわたる鴨緑江に沿った国道では、数十メートル先の対岸で生活し



ている北朝鮮の農民たちや仕事中の兵士の姿も観察することができた。そして特に、北朝鮮の町と接する長白市と丹東市では、対岸にあるそれぞれ恵山市、新義州市を定点観測できた。中朝国境地域には、中国側から対岸の北朝鮮の町の状況を観察できる、いわゆる「ウォッチング・ポイント」が何か所かある。本報告は、こうした現場の観察を含め、中国側の開発区のスタッフ、研究者、そして地元のジャーナリストなどに面接調査をした成果をまとめたものである。

2．延辺朝鮮族自治州と延吉市

中朝国境地域を理解するためには、延辺朝鮮族自治州とその中心都市である延吉市の実態を知る必要があると考えた。調査に出かける前に私たちは、八月一八日～一九日に吉林省延吉市にある延辺大学で行われた「日中韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム」に参加した。延吉市は、吉林省南東部に位置する延辺朝鮮族自治州の中心都市（人口約六〇万）である。延吉市そのものは大都市ではないが、延辺大学は一九四九年に民族大学として創設され、今日では政府から吉林省重点総合大学に指定されている。広いキャンパスは、この数年間で新しく拡充・改装されて、快適な空間を作り出している。国際シンポジウムは、中国、韓国、日本の研究者が二年に一度集い、言語、文学、

歴史、民族、そして政治などをテーマに研究と意見の交換をする場である。およそ三〇〇名が参加する会場には、中国語、朝鮮語（韓国語）、日本語が飛び交い、日本への留学経験者も少なくなかった。

ここで強調したいことは、①吉林省が中朝国境地域の三分の二を占めていること、②延辺朝鮮族自治州では漢族（中国人）と朝鮮族の二つの言語、文化、習慣が融合していること、③延辺大学は中朝ばかりでなく韓国、日本を含めた、北東アジアのアカデミックな交流ネットワークのハブを形成していることである。延辺大学では研究者の交流ばかりでなく、韓国、ロシア、モンゴル、日本、タイなど三〇か国以上から、数百名の留学生が学んでいる。ここは北東アジアの交流の縮図であり、少し大げさにいえば、将来、この地域に共通のアイデンティティを共有することのできる若者たちを育てる場ともなっているのかもしれない。

ところで、ここでいう朝鮮族とは、何世代にわたって朝鮮半島から北上し、主に吉林省東南部に定住した人々のことである。中華人民共和国の成立後に延辺朝鮮族自治区となり、一九五五年に延辺朝鮮族自治州となったのである。中国政府が認める五五の民族の一つである。現在の人口は約二二〇万人であるが、実態からいうと、住民は漢族（約六〇％）、朝鮮族（約三五％）のほか、満州族、回族など一九の民族からなる。延吉市においても朝鮮族は少数派になりつつあるようだ。実際、タクシーの運転手は男性も女性もほとんどが漢族で、延吉市に出稼ぎにきた人々である。聞くところによると、朝鮮族は、仕事をするために中国の大都市や韓国へ気軽に出ていく傾向があり、日本に親戚や知人がいて日本語が話せる人は日本も訪れる。学生たちも中国ばかりでなく韓国や日本に留学する者も少なくないという。定期的に外国で働き、帰国してその稼ぎで豊かな生活を実現する。自分たちがやらない仕事は漢族に任せる、という傾向がうかがえる。もちろん北朝鮮には気軽に出かけられないが、そこに親戚や知人を持つものもいる。朝鮮族はフットワークがいい、という印象である。朝鮮族は北東アジアの人や文化を結びつける役割を果たしているのかもしれない。

3．調査の行程と中朝露国境地域

私たちの中朝国境地域の調査は、ロシア国境に近い東側の辺境から始めた。日程表にあるように、一日目は、ロシアと北朝鮮が見渡せる防川から琿春市、図們市へと内陸へ足を運んだ。防川の展望台からの眺めは、地の果てを思わせる広大な絶景で

はあるが、中朝露の国境が接し、ヒトやモノが往来する地域と考えれば、見る目は違ってくる。防川から図們江に沿って北上すること約一時間のところに、その証拠がある。琿春国際開発区である。

八月二〇日	①防川（中朝露三国国境地帯）、②琿春市（国際開発区訪問、中露国境、税関）③長嶺子（中露国境、税関）、④図們市（中朝国境橋、税関）
八月二一日	⑤龍井市の三合鎮（中朝国境、税関）、⑥和龍市の崇仙郷（中朝国境、税関） 午後は長白市へ向かう
八月二二日	⑦長白市（対岸北朝鮮の恵山市を望む） 集安市、通化市を経由して丹東へ向かう
八月二三日	⑧丹東市（地元記者への聞き取り調査、中朝国境橋の視察、対岸の新義州市を望む）

この国際開発区の広大な土地が、ロシアや北朝鮮との貿易で、石炭などの資源、軽工業製品、水産物などの物流の拠点になっている。私たちが訪れた国際開発区事務局の新しく巨大なビル（写真①）を見ただけでも、貿易に対する中国の意気込みが感じられる。ここで聞き取り調査に応じて下さった副局長（匿名希望）からは、以下のような情報を得た。

琿春国際開発区からロシアのザルビノへは鉄道があり、軽工業製品、果物、野菜、水産物など、年間約三〇万トンが輸出されている。ロシアからは木材、石油、水産物など年間八〇万トンが輸入されている。琿春には毎年約一七万人のロシア人が入国している。このロシア人は、観光目的ではなく主に「担ぎ屋」を商売とした人々である。彼らは中国製品だけではなく、大連、青島、丹東などから入った韓国製の家電製品、衣類、軽工業製品を買い付け、ロシアへ運んでいく。一人の担ぎ屋が運搬できる荷物量は、公式的には三五キロまでであるが、実際には五〇キロまで黙認されている。ロシアの会社が、担ぎ屋を雇用して商売をしている事例もある。

琿春国際開発区から北朝鮮へは、日用品や軽工業製品など、年間約六〇万トンが輸出されている。北朝鮮からは、年間約八〇万トンの石炭が輸入されている。ここの開発区から北朝鮮の羅先工業地域へは鉄道があり、一日約五〇〇両の貨車が出ている。ここから北朝鮮のウォンジョンリの間には、新しい税関が建立される予定である。また琿春国際開発区には韓国や日本の企業も多く進出しているほか、北朝鮮からはおよ

（写真①）琿春国際開発区の事務局

そ二、四〇〇人の労働者が来て働いている。彼らは水産加工や縫製関連の仕事に従事しているが、北朝鮮労働者を雇用できるのは中国企業だけである。北朝鮮労働者は主に女性で、宿舎が与えられ、許される滞在期間は三年間で、二年間の延長が可能である。

4．丹東における中朝関係

丹東は遼寧省の南東部にあり、北朝鮮と国境を接した中国の都市としては、最大級の辺境都市である。丹東の人口は約二四〇万人、丹東市街地の居住者は約七〇万人である。市内に住む朝鮮族は約一八、〇〇〇人で、鴨緑江を挟んだ対岸にある北朝鮮の新義州市では約四〇万人が生活している。丹東駅から数百メートル南には鴨緑江があり、新義州市へ向かう中朝友誼橋（全長九四六m）が架かっている。この橋には鉄道と道路が敷かれていて、中朝国境を跨ぐ物流と人流の中心的役割を果たしている。中朝貿易の七割が丹東を通過するといわれていることから、この橋はその象徴ともなっている。丹東の税関では毎朝、この中朝友誼橋を通って北朝鮮へ貨物を運ぶ通関待ちのトラックが列をなすそうである。その物流の増大を見越して、この橋の下流には最新の吊り橋型の巨大橋が建設中である。この新鴨緑江大橋は現在の四倍もの交通量に対応可能で、二〇一五

年中には開通予定だと聞いた。この地域には「丹東新区」と呼ばれる大規模な経済開発区が建設中である。

もう一つ注目すべきことは、中国から北朝鮮への石油輸出である。北朝鮮は石油のほぼ全量を中国からの輸入に頼っている。その多くが、ここ丹東の山岳部にある巨大な原油貯蔵施設から鴨緑江の地下を通過して北朝鮮の原油精製施設（平安北道）に至る全長約三〇キロのパイプラインに依存している。北朝鮮にとってこのパイプラインが「命綱」であることは間違いないであろう。私たちはこの丹東市で、地元紙「遼寧日報」の前丹東支局長（匿名希望）に面談することができた。その内容は下記のとおりである。

ここでは、毎年一〇億ドル規模の中朝貿易が行われている。北朝鮮から丹東へは、石炭、胡麻、漢方薬剤、蕨などが輸入されている。丹東の朝鮮族は、北朝鮮との貿易に従事する人がほとんどであり、この貿易のために朝鮮族の人口は増えている。貿易の形態は、政府が介入した民間人貿易である。韓国から商売を目的として丹東に滞在する人は、約六、七〇〇人である。最近、韓国人に対する中国入国ビザ発給が厳しくなった。韓国人は北朝鮮で委託加工式の生産をしていたが、

（写真②）長白市から対岸の恵山市（北朝鮮）を望む

(写真③)　丹東の鴨緑江を一望できる遊覧ボート：左岸が中国側、右岸が北朝鮮・新義州。かつては新義州側の方が栄えていたが、現在、丹東側には高層ビルや高級ホテルが乱立しその格差は歴然としている。

韓国政府による対北朝鮮経済制裁措置（五・二四措置）により、ほとんどが中止になった。丹東から中国人が北朝鮮観光に出かける。新義州市への日帰り観光をはじめ、東海滝への二日間観光、平壌・板門店への三日間観光などがある。毎日、約二、三〇〇人が北朝鮮へ観光に出かけていることになる。丹東地域への北朝鮮からの脱北者はあまりいない。その理由として、新義州市の経済事情が良いということが考えられる。二〇年前、鴨緑江に廃船を利用したカジノ事業が計画されたが、失敗に終わっている。

5．調査のまとめ

中朝国境地域を現地調査して、そこには国境を管理する国家の政策、そこから経済発展に結び付けようとする発展計画、国境を超えてビジネスを展開する民間のエネルギー、国境を観光の目玉にしようとする国や民間の思い、など様々な視点が見えてきた。本報告では、①格差、②国境線、③開発区、④観光、⑤労働移動、⑥政治的影響という視点から分析したいと思う。第一に、鴨緑江を挟んで両岸に二つの町が一望できるところでは、両者の発展の格差が歴然としていることである。たとえば長白市と恵山市、丹東市と新義州市をそれぞれ比較すると、かつて一九七〇年頃までは北朝鮮側が経済的に豊かであったが、

(写真④)　丹東と北朝鮮・新義州を結ぶ橋：手前は戦前の日本が建設した鴨緑江断橋（朝鮮戦争中に米軍の爆撃機によって破壊されそのままになっている)。向こう隣が中朝友誼橋で鉄道と道路が敷かれ経済交流の象徴となっている。

今日では中国側がその規模、産業、インフラなどで圧倒的な経済力を誇るようになっているということである。北朝鮮側の町では古い建物がそのまま残り、発展が止まっているような印象を受けるが、中国側の町では、たとえば丹東にみられるように、高層アパートと高級ホテルが乱立して、対岸からはまるで「発展の見本市」のように見えるであろう。両岸の都市の歴然とした経済格差は隠しようがなく、両国民も訪れる観光客もみな事実として感じ取るのである。

第二に、数百キロに及ぶ鴨緑江が中朝の国境線となる長白市から丹東市までは、中国側に部分的に鉄条網を見ることができたが、ほとんどが柵や検問所のない自然が国境線そのものだったことである。私たちにも対岸の農民が川で洗濯をしている様子が見て取れ、川を渡れば容易に行き来ができる状況であることが理解できた。現地で聞いた最近の情報によると、数か月前に北朝鮮の兵隊が数名、川を渡り中国にやってきて中国人宅を襲い、殺人事件にもなったという。その結果、中国側の警戒が厳しくなり、道路に防犯カメラが取り付けられるようになったとも聞いた。ここから見える北朝鮮の農村は、人口の少ない遥か辺境の地である。この地域にはヒトやモノの交流はなく、中朝両政府にとっても開発を期待するところではない。また脱北

者のルートとして注目すべきところでもないようである。中朝国境地域は、壁が築かれたりお互いの兵隊が厳しく対峙するところではなく、その多くがこのような自然環境を保持しているのである。

第三に、ヒトやモノが行き来し、将来の経済開発拠点と見込まれたところでは、中国政府が重点的に資金と技術を注ぎ込むということである。私たちが訪問した琿春国際開発区は、ロシア、北朝鮮、日本との将来における貿易と経済・技術交流を見据えた一大拠点である。図們江にある琿春の港からは大型船で日本海／東海に貨物を運ぶことはできない。すぐ近くのロシアのポシェットとザルビノに鉄道で貨物を運んでから日本の港へ行くことになる。物流の専門家の間では、図們江の川底を深く改修して琿春港から直接、新潟港や境港へ貨物を出す計画が議論されている。もしこれが実現すれば、これまで大連港から輸出していた中国東北部の生産物は、琿春から近いルートを通って日本にやってくる。距離と時間を短縮した日本海／東海の物流革命である。ただ残念ながらこの構想は今日ではほとんど話題になっていないことである。巨額な資金が必要となるからであろう。中国政府が国境地域に重点的に資金と技術を注ぎ込む事例としては他に、対岸の恵山市をにらみ新しい税関と巨大な物産展会場が造られている長白口岸国際商貿城、そして、丹東市に建設中の新鴨緑江大橋に象徴される「丹東新区」と呼ばれる経済開発区である。

第四に、中国の辺境にある国境では、魅力的な観光スポットを人工的に作り上げ集客を狙う傾向があることである。防川では石造りの展望台がありロシアと北朝鮮が一望にできた。丹東ではイタリアのベニスの雰囲気を真似した高級ホテルがオープンしていた。頓挫したが丹東にはカジノ構想もあったという。まったく別の地域の話であるが、中国南部の雲南省とラオスの国境地域には中国資本のカジノが何軒もあるし、空港並みのきれいな免税店があることも珍しくない。私たちが現地で確認できたことは、いままで誰も寄りつかなかった辺境の地に、乗用車や観光バスで人々がやってくることである。これは高速道路が発達し、モータリゼーションの時代になったという理由だけではない。国境地域が安定していれば、経済発展の可能性と隣国との将来のＷＩＮ―ＷＩＮ関係を見越して先行投資をしているということではないだろうか。いま、中国では辺境に熱い視線が向けられているのである。

第五に、国境地域におけるヒトの往来と労働移動に注目する

ことである。国境地域での人の移動はダイナミックである。丹東では、毎日二、〇〇〇人以上の中国人が日帰りや三日のツアーなどで北朝鮮を訪れているし、六、〇〇〇人以上の韓国人ビジネスマンが滞在していることはすでに述べたとおりである。中露国境近くの中国側のいくつかの町からは、ロシアのウラジオストクやボグラニチヌイなどへ国際定期バスが運行されている。琿春だけでも毎年約一七万人のロシア人が入国していることを現地で聞いた。延吉や丹東などの主要都市には、北朝鮮女性らがショーを披露するレストランがある。彼女らは数人でバンドを組み、歌や踊りを披露しサービス精神もあるように見える。晩には興業をし、昼は同じレストランでウェートレスとして働く。店に入るだけで、彼女たちが北朝鮮で訓練され選ばれたプロたちであることが感じ取れる。こうした店は、街中でひときわ目立ち、他の中国のレストランと比較してもきれいで洗練されていてやや高価である。韓国人ビジネスマンや観光客も多く訪れる場所で、彼らにとっても体験したいスポットでもあるようだ。もちろんこうした活動が北朝鮮にとっての外貨稼ぎであることは周知の事実である。国境地域の労働移動の特徴は、その地域だけに許可された制度があることである。かつて訪れた中国とミャンマーの国境の町にも、パスポートとは別の中国人専用の隣国への通行証があり、レストランで働いている若いミャンマー人は一年間の中国労働ビザを有料で入手していた。

第六に、こうした国境地域にみられる独特な環境に政治的影響がどのように及んでいるのか、あるいは地域の活動が二国間、多国間関係にどのような影響を与えているのかに注目することである。国境地域の状況は政府の政策によって大きく左右されることは確かである。しかしまた同時に、国境地域特有のヒトとモノの交流が、政府の政策に影響を与えたり、国民国家とは異なった地域のアイデンティティや新たな地域空間を形成することはありえないのか。いま、政治学や国際関係論などの研究者にとって、こうした視点から国民国家を見直そうとする越境地域（cross-border region）や下位地域主義（sub-regionalism）の研究が注目されている。これらについては次の節で解説することにする。

6．下位地域圏研究の展望

国民国家は領土・領海と国境を明確にし、主権を至上のものと考える。同時に私たちが調査してきたように国境地域では、過去からヒトとモノの長い交流の歴史があり、特殊な空間を形成しているようにも見える。そしてその地域の交流や活動はその時々の政治的状況や政府の政策によって影響を受けやすいの

も事実である。ここでは、これまで述べてきた中朝国境地域が最近の政治状況によってどのような影響を受けてきたかについて分析し、そして国境地域と国民国家の関係について展望を述べてみたい。

二〇一六年二月、中国人が最も大切にする春節（旧正月）にあたる七日に、北朝鮮によって長距離弾道ミサイルが発射され、沖縄地方上空を通過したものと判断された。中国はこれまで北朝鮮の「後ろ盾国」として主要国の経済制裁にも積極的に参加してこなかった。北朝鮮の貿易割合では対中国が九割を占め、石炭を中国へ輸出してはいるものの、原油のほぼ全量を中国からの輸入に依存している。北朝鮮の生命線を握っている中国が、本格的な制裁に踏み切ったら、中国が恐れる北朝鮮の体制崩壊につながりかねない。中国は国連の場でも制裁に踏み切らなかった。ところが二〇一六年一月六日の核実験に続いて、このような北朝鮮の行為に対して状況が変化してきた。二月に中国外務省は「国際社会の反対を顧みず、かたくなに発射を実施したことは遺憾だ」と批判した。こうした中国政府の態度が、中朝貿易の七割を占める丹東の状況にどのような影響を与えているのか。二〇一六年二月～三月の報道から探ってみることにする。

現地取材に基づくいくつかの報道によれば以下のとおりである。丹東の税関では、貿易関係の荷物検査を一部で厳しくすることが確認され、中国側が北朝鮮への投資事業を見合わせる動きがある。国連の安全保障理事会では、二〇〇六年の北朝鮮による最初の核実験を受けた制裁措置として、「ぜいたく品」の禁輸を各国に義務付けてきたが、丹東ではどのような状況だろうか。丹東税関の近くの楽器店にはヤマハの中古ピアノが並んでいて、一月の核実験後も、一台約二万元（約三四万円）のピアノが同税関を通って二台が北朝鮮に運ばれたという。丹東からはこのほか、日本製のカメラやパソコンも北朝鮮に輸出されていて、韓国の国会議員の報告によれば、金正恩政権のぜいたく品輸入は、二〇一二～一四年で計約二一億ドル（約二三六〇億円）に達した。中国の公式統計では一四、一五両年の原油輸出はゼロで、中国が輸出を停止・調整しているとの見方も出ている。しかし、丹東山岳部にある巨大な原油貯蔵施設から鴨緑江の地下を通って北朝鮮へつながるパイプラインを使って、一定量が輸出されているとみられている。韓国政府は年間五〇万トン程度の原油輸出が続いているとみている（「読売新聞」二〇一六年二月八日、二月二三日／「朝日新聞」二〇一六年三月一五日）。

政治学や国際関係論あるいは国際政治学がめざす国境地域の研究には、ひとつの仮説が存在する。国境を超えたヒトの移動や接触が深化することにより国境を超える交流圏が形成され、新しいアイデンティティが生起する、という仮説である。国境地域の研究は、欧州連合（ＥＵ）や東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）のような国家を構成員とするような地域研究ではなく、国家の一部をなす地域が国境を超えて新たな交流圏を見出そうとする研究でもある。主権国家の枠組みに基づく領域性のみを前提とした現実認識とは違った視点を提示するものである。その場合の地域交流圏は下位地域圏（sub-region）とも呼ばれる。実際、ＥＵの周辺部にあるバルト海沿岸や北海沿岸地域、東南アジアではタイ、ラオス、ベトナム、ミャンマーなどの国境を接する地域で下位地域圏の研究が行われている。

本調査研究では中朝国境地域を、格差、国境線、開発区、観光、労働移動、政治的影響という六つの視点から分析してきたが、これも下位地域圏の形成を分析するための枠組みである。ただ、中朝国境地域には他の下位地域圏にはない複雑な国際環境を念頭に置かなければならない。北朝鮮の核兵器やミサイルなどの安全保障問題や不安定な中朝韓日の相互関係などが直接、この下位地域圏に影響を及ぼしてしまうのである。今回の現地調査で新たに認識できたことは、人の集住はまだ希薄ではあるが、中朝国境の東側辺境にある中朝露が形成する下位地域圏の可能性である。これまでは図們江開発プロジェクトとして国連も関わった多国間協力の場ではあったが、開発区、観光、労働移動をキーワードに更なる研究ができるのではないかという印象であった。

（付記：現地調査において行程計画、現地面会者との調整、通訳などで現地研究協力者として尽力くださった北陸大学の李鋼哲教授に心より感謝申し上げたい。二〇一六年五月脱稿）